

野に仏・里に仏

大谷 眞

第六回目の旅・その二
出会いは縁のもの

1994年11月10日晴れ

昨夜は一晩中眠れなかった。蚊がしつこく体を刺す。さすがに閉口し、殺生の誓いにも限度あり、

と起き出し、電気をつけて蚊を探す。ところがど

こに雲隠れしたのか、一向に見つからない。ふと

見ると、部屋の隅にあつた非常用ドアが少し開いたままになっていた。は

て？部屋に入ったとき、このドアに気がつき、2

階とはいえ不用心だなあ、と、あのとときちゃんと閉

めたはずなのに……。どうやら、このドアの隙間

から蚊が侵入したらしい。しかし、いつの間にドア

は開けられたのだろうか？外からは防犯上開けられ

に到着したときは、既に床がのべられていたから、この旅館の人が後で入ってくる必然性はない……。そこまで考えて、何やら薄気味悪くなった。

朝のくるのを待ちわびて、7時には部屋を出た。

変な宿だったけど、一応お礼を言うてから出発し、宿とは目と鼻の先の第四

十九番浄土寺にお参りした。後は、通勤ラッシュを

くぐり抜けて、第五十番繁多寺を打った。五十番

から五十一番までは2キロ半程の道。気が付くと、

とぼとぼ、といった感じで歩いている。どうも昨夜の寝不足が足に来てい

るらしい。いつもなら30分ほどの距離が、やたら遠く感じた。

団体客でこつた返している。参道の両側にも仏具屋、土産物屋が軒を連ねている。「この寺は、「猫寺」と異名をとるほど猫が多い寺と聞いていたので、以前から楽しみにしていたのだが、今日は観光客が多いせいか、皆さんどこかにおこもりの最中らしい。

石手寺からどんどん街らしくなってきた。松山市はやはり都会なのだ。

同時に遍路みちの標識が見つけにくくなって来た。道が温泉街に入り、場違いな心持ちで歩いている

と、「道後温泉」の横手に出た。木造3階建の、随分クラシックなお風呂屋さ

ん、と言った所か。かつてはここで、長い道中のア

力を落としていくお遍路さんも多かったに違いない。確か、その昔、お遍路

さんは何日間は無料で逗留できた、と何かの資料で読んだ気がする。しかし今では観光ならともかく、私のようなよれよれの歩き遍路には、ちょっと敷居が高そうに見える。

この後、とうとう方向を見失ってしまった。行きつ戻りつして、結局、鉄

道駅で客待ちのタクシーの運転手さんに道をたずねた。

「五十二番太山寺まで、と言われてもねえ、歩いて行かれるんですかあ……。」

面食らいながら、それでも大まかな方向を教えただいた。教えられるまま行くと、「四国の道」の標識を見つけ、これを感じて西に歩き始めた。

心細く、川沿いを歩いていると、偶然、「一草庵」の標識が目にとまった。川に架かる小さな橋を渡り少し行くと、ごく普通

の住宅街の中にひっそりと「一草庵」があった。山頭火が放浪の末にたどり着いた終焉の地が、ここ松山、友人たちの厚意で、この庵を結んだと聞く。いつものように酔って帰宅し、その夜、友人たちが句会に集まったときも彼は眠り続けていた。そしてそのまま、彼は全てから開放された。本人が切望した「ころり往生」だった。

玄関は鍵がかかっていたので、横手から裏に回る。ガラス戸の縁側から中をうかがうと、彼のも

のかどうか、床の間に位牌らしきものがちょこんと置かれていた。彼の長い放浪は、己を激しく痛めつけてまでの苦行であったのか、自暴自棄の単なる自虐趣味に過ぎなかったのか、その生き様の真意はともかく、彼の残した透明感にあふれる句の数々は、あまりに美しく、そして悲しい。そんな生き様に魅かれ、私もまた、カメラ一つでこの四国を歩いている。時間を越え、彼が晩年を生きたこの地に、今、自分もあつることの不思議を、しみ



じみと想った。

市街地を抜け、住宅地区を通り、広い車道に出たから峠を越えた。さらに山手のミカン畑を抜けると第五十二番太山寺に出た。時刻は1時半を回っていた。昨夜の寝不足からくる疲れが限界に達している。ふと見ると、

目の前の民宿の看板に

「ゆっくりくつろげる宿・

民宿上松

とある。この広告をしばらく眺めていると、今日予定していた30キロの距離が途方もない距離に感じ始めた。迷いながら歩きだし、まだ新しい道を進むと、突き当たりの交差点から少し行ったところが第五十三番円明寺だった。斜め向かいに、先程の「民宿上松」も見える。疲れも限界に達し、意を決して門前から電話で予約を入れた。

今日は早じまい、とゆったりした気持ちでお参りを済ませ、道を横切って宿のガラス戸を開けた。一階は食堂らしい。出て来られた女将さんに二階の部屋を案内された。「うちの主人もつい先日、

お遍路から帰って来たところなんですよ。あなたと同じ、歩いて回ったんです。」

と言われる。これも何かの縁だろうか。

コインランドリーの硬貨を両替してもらいに一階に降りた際、ご主人に出会い、これ幸い、とお話しをうかがった。

「それはまあ、最初はまめがひどくて、靴下、血で真っ赤になってしもうて・・・。」

時には、あまりの痛さに、裸足で歩いたりもされたとのこと。

「結局、靴3足、履き替えましたなあ・・・。」

25半の足に27でもまだ辛く、結局、幅広の28の靴に、クツシヨン性の高い中敷き2枚重ね、それでようやく歩けるようになった、と言われる。

「途中一緒になった若いものと、ずうっと一緒に歩いておったけど、もう二十日立つちゅうのに、結願の便りも来やせん。どうしよるんじやろう・・・。」

御主人は、ここ五十三番から歩きだされたので、ここで結願となるが、若

者にはまだ八十八番までのかんりの距離が残されていた。

「がんばれ、がんばれ、ちゅうて、けつたたいて、ここまで引っ張ってきたんやけんど・・・。」

やっぱり途中で、挫折したのだろうか、と心配顔で話される。

「ここまで歩いて来たんですから、きつと最後まで歩いてますよ。今頃、旅の疲れが出て、お礼の報告まで気がまわらないんですよ・・・。」

そうあれば良いのだが、と思いつつ話す。いつか最御岬寺への途中、雨の日の未明に、バス停で出会った若者の疲れた顔をふと思い出した。もう、ここで終わりにします、そう彼は言い残し、朝一番のバスで帰っていった。さみしそうに手をふる彼の横顔が、宿の主人の話にダブってくる。みんながみんな、自分の生き方を歩きながら探している。その心の荷は、所詮、自分で担うしかないのだ・・・。夕食時、テレビの相撲をしばらく見てから部屋に戻る。横になると疲れがどつと出て、すぐに眠



りに落ちた。

11月11日 晴れ時々曇り
4時半起床。6時前には出発した。外はまだ暗い。東の空によくやく朝の気配がする。円明寺の前を過ぎた後、道はそのうち国道に合流した。

実は今日は朝から落ちて着かない。円明寺から次の第五十四番延命寺までの間に、番外霊場、鎌大師堂がある。ここの庵主様は手束妙絹尼である。「堂守歳時記」「人生は路上にあり」「お遍路でめぐりあった人びと」など、多く

の随筆や句文集を世に出された方だ。15回の徒歩遍路の末、ここ松山市に近い北条の地の、ゆかりあるお堂に縁あって落ちて着かれたと聞く。今回のお遍路の、直接のきっかけを与えていただいた方でもあることは先に書いた。

彼女の著作にふれた当時、お歳は既に若くはなかった。それゆえ、まだご存命かどうか知る由もなかったが、かつて番外霊場、鯖大師から同行したMさんに、実は彼女の消息を偶然聞く機会を得て

いた。彼もまた、妙絹尼の著書に深く感銘を受け、わざわざ遍路に先立ち、車を飛ばして会いに行つたのだと言つ。そうか、まだ生きていらっしやるのか、そう思うと、とにもかくにも歩き通して、鎌大師へお参りをしてみたい、その気持ちを励みにして、今日まで歩いて来た。とは言え、会って何をお話すれば良いかも分からず、多分これは、年齢不相応なミーハー的願望に過ぎないのかも知れない、とも思う。ただ、お参りしたおりにでも、お顔を拝見

できればそれで充分、そう考えていた。

あれやこれや、考えながら歩いていると、思わぬ早いペースで国道からの分岐点に来てしまった。踏切を渡り、しばらく行った所で農作業中のご夫婦に道を尋ね、やがてあっけなく鎌大師堂に到着した。

なんでもない、ごくありふれた村のお堂、というのが正直な印象だった。まだ建つて間が無いようにも思えた。著書の中に繰り返しふれられている「大師松」らしき松も見当たらない。彼女は朝な夕な、この老松を仰ぎ、心のより所とされて来た。はて、場所を間違えたのか？と思う。それでも「鎌大師」であることには間違いない……。

お参りを済ませ、納経帳を持って、大師堂左手に建つ「自素庵」とあるお庵のベルを鳴らした。しかし返事がない。ためらいつつガラス戸に手をやると、がらりと開いてしまった。

「こんにちは。」

呼んでもやはり返事が

ない。残念ながらお留守のようだ。もしかして、ここに来るまでのほんの少し前、すれ違った車に、お年を召した婦人と若い女性の姿を見かけた。あの方だったのだろうか？

会いたい想いも、縁がなければ独り相撲、次の機会に希望を託せばいいか、と無理矢理考えることにした。それでも、お遍路の意味が、半分以上なくなってしまうたような寂しさがあつた。来る前の元気はいずこやら、背中の荷物もぐつと重みを増した。大師堂から横手の坂を登りきり、くだつて集落を抜け、やがてまた国道に合流した。海沿いの道を、とぼとぼ歩く。

「遍照院」とあるお寺で、気を取り直してお参りを済ませ、いつものようには休息もとらず、そのまままた国道へ出た。出たところのバス停に飲み物の自販機を見つけ、ふらふらと一本買い求め、近くのベンチにへたり込んだ。ぼんやり地図を広げていると、先程の遍照院から、小走りにやって来る婦人が目に入った。彼女はそばまで来ると弾

む息で、
「先程は、お休みになるのかと思つて……。」

お参りする私を見かけ、奥でお茶を入れて出て来たら、もういなかった、国道へ出てみたら、バス停でへたり込んでいる私を見つけた、と言われる。

「ジュースを飲んでらっしゃるから、せめてお茶菓子を、と思つて……。」
恐縮しつつお礼を述べ、私の納札を替わりに差し出した。彼女はそれを大切そうに押し頂き、

「気をつけてお参りくださいね。」
と、また小走りに帰つていかれた。鎌大師の件でふさいでいた気持ちだが、急に軽くなった。出会いは縁のもの、まさにそんな気がした。

少し元気になってまた歩きだす。12時頃、真新しい公園のベンチを借り、海を見ながらお昼を食べた。渡つて来る風が実に心地よい。11月というのに、Tシャツ一枚である。

さらに歩き「青木地蔵」で休憩。無人のお堂ではあるが、立派な通夜堂もあつた。横手には義足、松

葉杖等が積み上げてある。不要となったものを奉納されたらしい。単に新しいものと交換しただけなら、奉納とはなるまい。恐らく、全治祝いの感謝を込めた奉納であろう。しかし、松葉杖ならともかく、義足に全治はあり得ない。だとすると・・・？

不治の病や体の障害は、その人に課された言わば修業のかせとも言える。死は来世への新たな門出、と心から信じる人々にとっては、障害という呪縛からの解放は、苦行の末の結願となるのかも

れない。だからこそ、感謝の奉納となるのでは・・・、いろいろ思いを巡らせてみる。

休んでいると眠りに落ちそうになる。やはりお昼を回ると、ペースがぐっくり落ちた。午前中にいかに歩くかが、一日の距離を決めてしまうようだ。そろそろ宿の事を考えねばならない、そう考えながら、また重い腰を上げた。

11月12日 晴れ

4時起床。お湯を沸かし、簡単な朝食を取る。6時前には歩きだした。気持ちの良い朝。ただし国道沿いなので、車は既に引っこりなしに行き交っている。今日は6回目のお遍路の最終日となる。

本日の宿、「ビジネスホテルつよし」は、2食付き、とあったが、素泊まり



宿より4キロ、第五十四番延命寺は国道より少し左手に入る。お日様も顔を出した。お参りを済ませ、いったん門外に出たものの、次の南光坊への標識が見当たらない。もしやと思い、延命寺の境内に引き返す。ホウキを使っていた男性に道を尋ねると、この鐘楼の横手からの小道を進みなさい、と教えられた。

墓地をぬけ、集落の間を歩き、四つ辻に遍路石を見つけて眺めていたら、突然、

「お遍路さんー」

と空から声がした。はて、と声の主を探すと、

「あっちーあっちー」

と、近くの庭の植木の上で、老人が指をさし示している。庭木の剪定中のようにだ。道に迷っているのかと思われたらしい。一礼してまた歩きだした。いつもながら、さりげないご厚意に感謝。

公営の墓地らしい広い敷地を抜け、朝の慌ただししい車を横目で見ながら市街地を抜ける。9時前には第五十五番南光坊に到着。本堂と大師堂が駐車場で見切られていた。

南光坊から第五十六番泰山寺へは3キロあまり。細長い境内の、端と端に本堂と大師堂が位置している。

泰山寺を出て、田のあぜ道を延々と歩いた。やがて干上がった川に突き当たり、この川底を歩いて渡る。昔から遍路道として利用されているのか、川の両岸には遍路石が置かれていた。昔から水量があまり無い川だったのだろうか。

しばらく一般道を歩き、また田のあぜ道を抜ける。小さい坂を、よいしょつと登ったら、第五十七番栄福寺の駐車場に出た。どういうわけか、あまり広くも無い境内に、鐘楼のすぐ横手にまで参拝者らしい車が突っ込んであった。駐車場と境内まで、目と鼻の先というのにこれには呆れた。

お参りを済ませ、納経所で人を待つがいつまでたっても現れない。後から続く参拝者が、せっかちにベルを何度も押す。限られた時間にできるだけ多くの札所を回ろうと、殺気だってくる人もいるのだろう。いやはや、何の

ためのお遍路なのか…。次は第五十八番仙遊寺へと向かう。栄福寺の境内を出て、心地よい山道を登り、アスファルトの道に変わったところで、向こうから同じく歩いて来るお遍路さんに出会った。初老の男性で、手にした杖の先がちびたままホウキのように広がっていた。彼とは、昨夕、既に面識があった。

「いやあ、お早いですね。もう仙遊寺に参られたんですか？」

昨日声をかけたときは、延命寺の近くで宿を取る、と言われていたから、ほぼ私と同じペースのはずだ。なのに、随分先を越されたな、と少しショックを受けた。やがて現れた真新しい山門から長い石段を登りきると、第五十八番仙遊寺の境内に出た。標高が高いせいか納経所には既にストーブが焚かれていた。

再び石段を下り、標識に沿って山道に踏み込んだ。集落に出たからしばらく歩くと第五十九番国分寺に到着。今回はここが最終の札所となる。

今回の締めくくりの予

定にしていた近くの駅を地図上で確認し、境内を出たところで、朝方の老遍路にまた再会した、たった今、境内に入ろうとするところだった。

「あれ？もうずっと先まで行かれてると思ってるのに・・・。」

「いやあ、五十七番の栄福寺さんを打ってなかつたもので・・・。」

地図の順

番からいつて、行きつ戻りつでは、随分効率が悪いのでは、と言つと、

「どうも何事も行き当たりばつたりでね。」

「ところで、今日中に六十番さんまで行けま

すかねえ。」
と言われる。第六十番横峰寺と言え、ここから

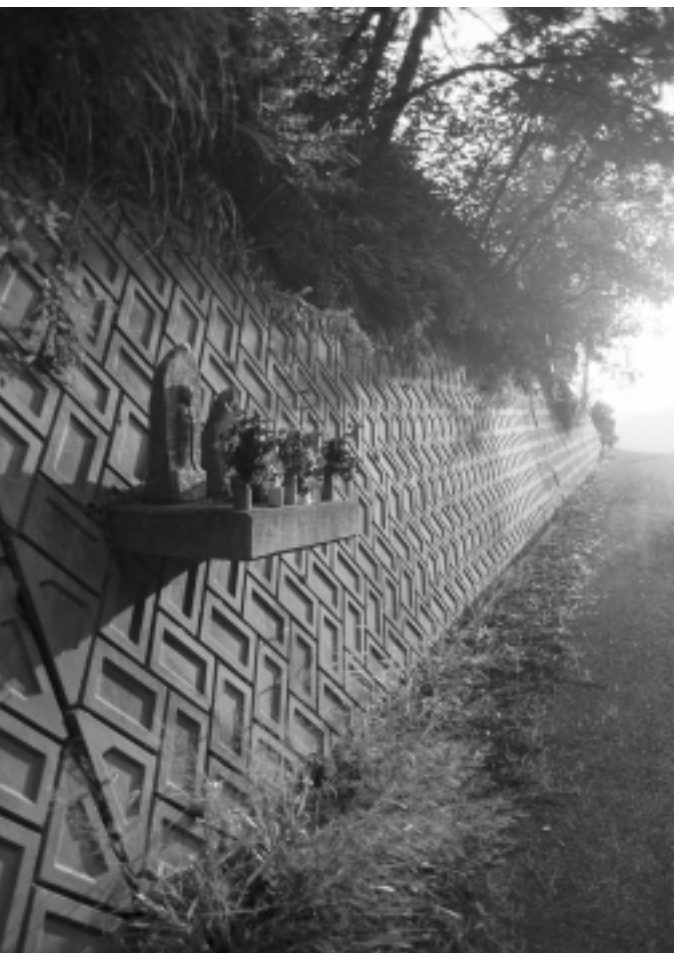
まだ30キロ以上はある。しかも石鎚山の中腹、難所として有名な山寺だ。時刻も2時を既に回っていた。驚いて、

「いやいや、それは絶対無理ですよ。」

と、慌てて忠告する。どうやら彼は地図はもとより、具体的な資料は何も持たれていないらしい。行き当たりばつたり、と本人が言われるとおり、人に聞きながら、あとは標識

見いだせるのかも知れない。何度歩いても新鮮な出会いがある、いつか出会ったベテランの歩きお遍路さんの話も、ふと思いだした。

国分寺からしばらく行つたJR伊予桜井駅の待合室を借り、今回はお



を頼りにして、足の向くままお参りされているようだ。そうか、それもまた、お遍路のひとつの形なのかも知れない。それにしても、いろんな形のお遍路があるものだ、と思う。しかしながら、百人

が百通りの体験を積み重ねてこそ、自らの活路が

遍路の衣装を解いた。壬生川駅まで出て、東予港から大阪に向けてフェリーを使う予定だ。六回目のお遍路も無事終わった。